

正行

シテ
楠木正行
トモ 正行の臣

ワキ 吉野の僧兵
ワキツレ 同

狂言 正行従者

時 所 大和吉野
春

シテ

「これは楠正行にて候。扱も此度後醍醐天皇崩御な

らせ給ふにより。卿相雲客散々になり給はん志見

えて候。天皇の御遺勅には。第七の宮を御位に即

け給ひ。朝敵追伐の。御本意をとぐべしとの。御

遺勅にて。程なく崩御ならせ給ひ候。さる間七の
宮御位に即かせ給ふべき其間。若し逆臣の寄せ來
る事もあるべきかと存じ候程に。此三吉野に城を
かまへ。皇居を守護し申さばやと存じ候。如何に

誰かある。

狂言

「シカぐ。

シテ

「急ぎ御所に櫓をあげ候へ。

狂言

「シカぐ。

シテ

「何と当山よりの文と申すか。やがて開いて見うず
るにて候。抑も当山と申すは。王城鎮護の靈地に
て候。王法を仰ぎ天下第一の御祈禱所なり。然る
に此山に於て。落花狼藉心得ず候。此事留り給は

づば。当山の面々押し上せ申すべきものなり。言語道断。是は一大事にて候。

狂言
「シカぐ。」

シテ「實にく汝が申す如く。さらば歌にて御返事申さうするにてあるぞ。急いで此文を渡し候へ。

狂言
「シカぐ。」

シテ「たとひ面々寄せ来る共。何程の事のあるべきぞと。

地「太刀おつ取つて立ちあがり。く。時しも春の花

ざかり。散らさでなどかあるべきと。木陰に立てひそかによする敵を待ち給ふ。く。

ワキ立衆「よし野川。花の白浪声たてゝ。鬨を作つて騒ぎけり。

地「正行これを三吉野のく。山辺に咲ける桜花。雪かとのみにあやまち給ふなど。切つてかゝり。蜘蛛十文字。しおぎを削り。戦ひければ。さしもの兵斬り立てられて大勢ばつとぞ引きたりけ

る。

「のうく正行。以前の詠歌の心を感じ。和睦をなさんと思ひしかども。正行が武勇を見ん為なり。此山の神慮も照覧あれ。面々いよく和睦ぞと。太刀長刀をなげ捨て。」

ワキ立衆
「各々座敷に直りつゝ。正成笠置へ参られし。謂を委しく語り給へ。」

シテ
「さあらば語つて聞せ申し候べし。そもそも北条の時政九代に至り。高時と云へる逆臣あり。」

地
「其身は上下の礼を乱し。万民更に安からず。然れば後醍醐天皇。凶徒を静めん其為に。」

シテサシ
「都を忍び御出あり。笠置の山に入給ひ。御堂に御座を構へしに。或夜不思議の御靈夢あり。」

クセ
「びんづら結へる天童の。二人来つて申す様。此常盤木の南に座せる此枝の其下に。暫く御座をなし給ひ。敵を亡しおはしませと。云ひ捨て雲井に上

れば夢も覚め給ふ。

シテ
「帝夢中の有様を。

地
「文字にうつさせおはしまし。当寺の衆徒を召し出し。楠と云へる武士。若しもありやと宣へば。金剛山の麓に。さる弓執の候と。奏し申せば勅使立つ。頓て正成参内し。治めし国の例をば。引くや親子の我も又。敵を亡し君が代を。幾千代迄とあふがん。

ワキ
「委しく御物語り候物かな。此面々も御味方申さうするにて候。これと申すも我君の。御代万歳の初なれば。和歌を詠じて舞を舞ひ。急ぎ酒宴をなし給へと。

シテ
「衆徒中共に。喜の。

地
「心嬉しき酒宴かな。

ワキ
「如何に正行一さし御舞ひ候へ。

地
「心うれしき酒宴かな。

地

「かくて酒宴も時過ぎてく。夕陽西に傾きければ。
各々用意をなさんとて。座敷を立てば。正行も喜
びげに此君の御聖徳。久しき春に逢ふ事も。思へ
ばこれも敷島のく。和歌の道こそ目出たけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著
『四流対照謡曲二百番下巻』芳賀矢一訂